

## 見えない軌跡は

兵庫県・灘中学校 3年 馬場 悠輔

その着信は、決して今を遠くさかのぼるものではない。けれどもひどく昔のこのように思われるのは、やはり、それを境に私の心の中で何かが大きく変わったからなのだろう。

私の中学入学は、家族と離れた下宿生活の始まりでもあった。今まで祖母と両親が、働きながら家のためにしてくれていた家事や買い物。その多くを自分で解決しなくてはならなくなったのだ。だから、初めは慣れない日々の中で幾度も途方に暮れたものだった。その最たるものが、お金。お金の扱い方が、何度私を困らせたか覚えていない。ちょっとした飲食代から、機械の修理代まで。日々起こりうることに備えて、以前より遥かに多くの金額を家族から預かった。「お金」というものが一体何なのか分からないながらも、私は預かる大事なお金をどうにか遣り繰りしていた。

しかし、2年と少し。毎日が見馴れたものになった頃。時間の経過は、すっかりお金を使うことに慣れさせてくれていた、いや、正しくは、私は「そのような気になっていた」のだろう。なぜなら実際には、「慣れた」お金の使い方とは程遠いものだったからだ。

少し喉が渴けば自販機に向かう、少し目に止まった品があれば財布を開く、少しでも気に食わなければすぐに物を捨てる——今思えば、私は「お金」という紙切れが傍<sup>そば</sup>にあることに対して、何も考えなくなっていただけであった。それが当然かのように振る舞っていただけであった。大げさな表現かも知れないが、2年という月日の中で積もっていた錯覚は、確実にこの方向へ進んでいた。

そして、そんな浅はかな危うい気持ち、心を取り巻いていることにも気付かず、母からの着信を受けたのだ。

「悠輔。落ち着いて聞いてね……。おばあちゃんが倒れて入院してるの。」しかし、母の声はそんな薄っぺらの気持ちを既に通り越して、私の心の奥の方をつかんでいた。

祖母は心筋梗塞だったそうだ。長年の仕事の心労が祟ったのか。この2日は峠だったが、今朝やっと回復の兆しが見え始めた。だからあなたに連絡した。

言葉の一つ一つを受けて、いろいろなものが私の中で渦巻いた。衝撃、心配、安堵。他にも言葉にならないようなうねりが。けれどもその中で、最初に姿を見せたつかまれる感触は、はっきりと現実味を帯びていった。

電話を切っても静まらない感覚。理由の一つは明確だった。私は、祖母が倒れるまで働いていたことを知り、初めて自分の錯覚に気付いたのだ。祖母は、多くの従業員を抱える会社をずっと一人で支えていた。そんな懸命な姿は、容易に想像できたはずなのに。私はできることをしなかったのだ。血の滲むような努力をする祖母や両親と、それが当然かのように振る舞う自分。二つを並べてみた。それは決して同時にあってはならない光景だった。

さらにもう一つ。両親は、祖母の回復を信じて待ち続けてから連絡した。私を心配させたくないという思いからだ。こんなときまで私のことを思い遣ってくれた両親。思えば2年間、いや、私が気付いていないもっと前から、家族が私の<sup>そば</sup>傍を離れた日は無かった。家族の温かい気持ちは、お金という姿に変わっていただけであった。

電話はまだ目の前。やっと考えが巡り巡った後、つかまれるような、締め付けられるような、そして包み込まれるような感触は、私の中の何かを変え、抵抗あるものではなくなった。その代わり、前向きな反省と、ずしりと重くなった財布の存在感だけが残った。

今、私ははっきりと言い切ることができる。自分のお金に対する考えが、着信を受ける以前のそれとは確実に異なると。お金は単にあなたを満たすための紙切れではない。あなたの手に渡るまでに確かな道筋があって、あなたの手を離れてからも確かな道筋を刻んでゆく。そんな簡単な事実だが、気付いて理解するのは決して簡単なことではないのだ。

よく、お金で人の気持ちは買えないと言う。けれども、お金に「人への気持ちは込める」ことはできる。私のお金には、家族の優しさが込められている。ぬくもりが込められている。そんな心を尽くして働く人たちの気持ちこそが、きっとお金の道筋を創り出しているのだろう。だったら私は、その気持ちを汲み取れる人間でありたい。1枚の硬貨が私の許へ辿り着くまでに、一体何人の人が気持ちを込めてきたのか——その軌跡を見つめ尊ぶことができる人間でありたい。

——もうすぐ、祖母が退院する。私はまだ働けないが、いつか、汲み取るだけでなく、お金に「自分の気持ち」を込められる日が来たなら。そのとき、私のお金の使い方はようやく「活きた」ものになると、信じている。